

函館高専@新聞

令和4年度
第118号

発行責任者
工藤 康平

記者

- 村田 隼
- 宮崎 安莉
- 中村 涼
- 西川 景 サミュエラ
- 森田 滋
- 長野 あい
- 渋谷 桃果
- 山崎 優輝
- 太田 慎之輔
- 奈良 耀

函館高専
学生会新聞局

新任教員インタビュー

阿部校長

函館高専の新学校長に赴任した阿部恵校長は、函館高専に赴任する前は、八戸高専で英語を教えていた。その後、国際交流センター長を約7年、学生主事を2年経験し、函館高専の学校長に就任した。現在、阿部校長は函館市長や函館市内の教育機関、地元企業への挨拶に加え、学校内の問題解決のための情報収集を行っているという。函館高専の印象について何うと、まず「学生たちがみんな元気に挨拶してくれる。先生方もとても学生思いで、学生の面倒をみてくれている。とても良い場所だ」と函館高専の雰囲気が高く評価した。また、「山も海もあり、自然に恵まれた良い環境だ」とも話した。しかし、函館高専は女子学生が少ないという印象を受けたという。実際に、現在の函館高専の女子学生は全体の約二割と少ない。そこで阿部校長は、入学する女子学生を増やすにはどうすれば良いのか検討して



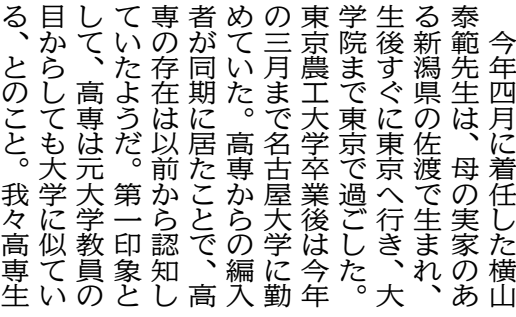
いるという。また、阿部校長は「海外の方と交流することで、学生たちのものの見方や考え方が成長する」と考えていて、国際交流活動を活発にしたいと話した。そのための試みとして、昨年度新設された国際寮に注目しているようだ。国際寮一階にあるグローバルセンターや国際寮前の空きスペースを利用して、留学生との交流イベントを開催したいという。海外への短期留学の参加も「十代のうちに多様な文化を持つ人々と活動する体験は、大人になったときに人生に生きてくるとともに、その経験が宝物になる」と推奨していた。最後に、学生へのメッセージを尋ねると、「今のままでなく、色々なことにどんどんチャレンジして、より良く変わって下さい」と話した。

牧之内先生



今年四月に着任した牧之内先生は、北海道大学の文学部哲学科を卒業し、その後北海道大学大学院を修了し、そして苫小牧高専などで非常勤講師として長らく務めていた。函館高専では世界史、倫理、人類史、日本史を担当している。本校での仕事については、「昔と比べると色々仕事が多いなあと感じる」と話した。本校学生の印象は「とにかく大人しい」とのことだ。おすすめの本を伺ったところ「たくさんあるが、特に教科書に載っているような文学者の本は読んでみてほしい」と話してくれた。本校学生へ伝えたいことは「スマホばかりでなく本も読んで、若いうちに色々なものに触れてほしい」と述べた。

横山先生



今年四月に着任した横山泰範先生は、母の実家のある新潟県の佐渡で生まれ、生後すぐに東京へ行き、大学院まで東京で過ごした。東京農工大学卒業後は今年の三月まで名古屋大学に勤めていた。高専からの編入者が同期に居たことで、高専の存在は以前から認知していたようだ。第一印象として、高専は元大学教員の目からしても大学に似ている、とのこと。我々高専生へのアドバイスとしては、「高専生ならではの強みを生かして欲しい」と熱く語った。観光で何度か北海道に来たことはあったものの、住むのは初めてだそう。歴史的で、空が広くてきれいな街だと函館についての想いも語ってくれた。今後の目標に関する問いには「科学を一人でも多くの人に好きになってもらうことが目標だ」と答えてくれた。

オンライン授業

本校は、コロナウイルスの感染拡大により4月13日から28日の間、授業を対面からオンラインに切り替える対応をした。入学してからもまだ一週間の出来事であった一年生にとって、オンライン授業はどのようなものだったのだろうか。そこで、一年生を対象にオンライン授業に対するアンケートを行った。（結果は小数点第一位とする。）

「オンライン授業は集中できたか」という問いには学年の約四分の一にあたる四十二人が「できなかった」と回答。逆に「できた」と答えた人の割合は29・0%に留まり、「まあまあ」という回答が最も多く46・2%だった。次の、「対面とオンラインどちらが分かりやすいか」という問いには、六割弱が「対面」と答えた。対面授業を望む声は多数派なもの、オンライン支持者も一定数いることが分かる。

「対面と比べた分りやすさの違い」では、「授業の速度が速すぎたり遅すぎたりした」「黒板が見えづらかった」などマイナスの意見もある中、「録画が残るのでノートをとめやすい」などの意見も見受けられた。「アクシデントの有無」については、43・2%が「あり」と回答。これは実に70人弱の生徒にアクシデントがあったことになる。具体的には、「インターネットの不具合」「声が入らない」「連うクラスに入っていた」などがあった。

緊張感や集中力が欠けてしまいがちな印象を受けたオンライン授業。授業の理解難易度もオンラインの方が高いという人は多かった。機器の扱いに慣れる前の一年生にとってオンライン授業は大きすぎる試験だったといえよう。教員と生徒が同じ空間にいる安心感を実感するいい機会もあった。一方的な授業展開が多く質問がしにくかった、席の近い友人との会話もできなかった状況は、相互的な高め合いや健やかな学びを妨げてしまっていたと思う。が、授業停止という最悪な形を阻止し、オンラインで生徒の学習に対し最善を尽くしてくれた先生方には最大限感謝したい。我々もオンラインであっても貪欲に知識を吸収していくべきではないか。

